

本質学は哲学の「本質」である

——『本質学研究』創刊によせて——

苦野 一徳

一、本質学とは何か

本質学とは何か。わたしなりにひと言でいうと、それは「意味の世界」の本質を説明する学である。

大ざっぱにいうと、わたしたちは、「事実の世界」と「意味の世界」の二つの世界を同時に生きている。

「事実の世界」というのは、物を手放せば落ちるとか、DNAは二重らせん構造を成しているとか、人が恋愛している時には脳の腹側被蓋野が活性化しているとカドー・パミンが分泌されているとかいった、文字通り「事実」の世界のことである。

この事実の世界のメカニズムを明らかにするのが、科学（事実学）の仕事だ。そしていうまでもないことだが、科学は、自身の仕事が常に仮説であり続けるということを、たえず自覚していなければならない。

その一方で、わたしたちは、世界を独自に意味づけ、味わいながら生きている。たとえば、事実の世界においては恋は化学物質によって説明できるかもしれないが、わたしたちは同時に、この恋のいわば人間的な「意味」を味わいながら生きているのだ。

哲学の本領は、この「意味の世界」の本質を明らかにすることにこそある。もっといえば、哲学とは、物事（意味の世界）の本質を洞察すること、その諸問題を力強く解き明かす原理（考え方）を出す営みである。

る。

先の例でいえば、たとえば恋がわたしたちにとってもっている「意味」の本質は何かを洞察すること。あるいは、「よい社会」の意味本質を洞察すること。そしてそのことで、ではそのような社会はどのようにすれば実現可能かという原理（考え方）を提示すること。こうした「本質」洞察に基づく原理の提示こそが、哲学の最も重要な本質なのだ。

二、本質学は事実学に先立つ

先にわたしは、わたしたちは「事実の世界」と「意味の世界」の二つを同時に生きている、といった。しかし原理的には、実は「意味の世界」は「事実の世界」に先立つものである。

なぜなら、そもそも事実の世界とは、わたしたちにとって意味ある事実として立ち現れた世界であるからだ。

わたしたちは、最も根源的には、つねにすでにわたしたちの意味世界を生きている。したがって、この意味の世界に捕えられないかぎり、どんな事実もそもそも事実として認識されない。

もしもわたしたちが、恋愛に何の意味も見出していなかったなら、恋愛現象の事実などというものは存在しない。ニーチェが言うように、「まさしく事実なるものはなく、あるのはただ解釈のみ」であり、「事実がありうるためには、一つの意味がまず置き入れられていなければならない」のである（『権力への意志』）。その意味で、意味の世界（本質学）はつねに事実の世界（事実学）に先立つのである。

にもかかわらず、現代学問は、事実の世界が意味の世界と独立して実在していると思ひ込み、長い間意味の世界をないがしろにしてきてしまった。

そう訴えたのが、二〇世紀の哲学者フッサールの、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』だった。

その理由は、一つには、フッサールがいうように、事実学が事実学としてきわめて大きな成功をおさめてきたからだ。現代科学の目覚ましい進歩が、わたしたちに、むしろ意味の世界を軽視させることを可能にしていたのだ。

しかしそのことが、気づいてみれば学問の危機をもたらした。そうフッサールは訴えた。そしてその深刻さは、今なお、彼の時代とあまり変わらないように思われる。

わたしたちは時として、何のための科学かというその意味の「本質」を見失い、ただ科学技術の発展にのみ心を奪われてしまうことがある。社会科学も同様、たとえば教育学は、そもそも何のための教育かというその意味の「本質」を探究することを、長い間怠ってきた。経済学もまた、少なくともつい最近までは、そもそも何のための経済学か、どのような経済システムなら「よい」といえるのかといったその「本質」を十分探究することなく、多くの場合、今ある経済活動の分析——すなわち事実学——に終始してきた感がある。

しかし、あらゆる「事実」は、繰り返すがつねにすでに「意味の世界」において成立するものなのである。現代学問は、今、本質学という学問の最も根本に敷かれるべき底板を、失ってしまっているのだ。

三、本質学の再興を

それゆえわたしたちは、本質学としての哲学を、もう一度根本からやり直す必要がある。

しかしその一方で、現代哲学は、これまで長い間、この本質学を忌避

してきた経緯がある。

その理由をここで詳論する余裕はないが、ひと言でいえば、それは現代哲学が、多くの場合、これまで「反本質主義」を標榜してきたことにある。

絶対の意味本質などありえない、それはつねに相対的なものである。これが多くの現代哲学者たちの常套句である。

それはもちろん、その通りだ。しかしわたしたちは、だからといって、一切をただ相対化し続ける必要などはない。なぜならわたしたちは、絶対の意味本質などないということを織り込みずみで、なお、できるだけ、共通理解可能な意味本質は何かと問い合うことはできるからだ。

相対化というのは、ある意味ではきわめて安易な営みだ。「そうともいえない」「それは必ずしも真ではない」ということを、ただひたすらにい続けなければならないのだから。

それに対して、できるだけ共通理解可能な意味本質を探究することは、きわめて困難な、そして創造的な営みだ。

絶対などない、ない、などとただいい続けるのはもうやめにしよう。そんなことは、哲学においてはとつきの昔からいい古されてきた「常識」だ。そうではなくて、わたしたちはその上でなお、できるだけ共通理解可能な意味世界の本質を、もう一度力強く問い合う必要がある。そのような哲学の営みを、もう一度始め直す必要がある。

たとえば、よりよい社会の本質、教育の本質、幸福の本質……。探究すべきテーマは数限りない。フッサールの言葉を借りれば、わたしたちの眼前には「無限の領野が広がっている」(『イデーネ』)。

これら「意味の世界」の本質を探究すること、そしてそのことで、諸事実学の成果をさらに活かせるような学問的土台を築くこと。それこそ

が、本質学、すなわち哲学の本質なのである。
『本質学研究』の創刊に、そうした本質学としての哲学の再興を期待
したい。